



好きという言葉  
葉



猫乃 春

## 第1話 出会いと告白

---

朝の日差しがまぶしい

カーテンから漏れ出した日差しが自分の顔に降りかかっていた

「あ・・・もう朝か・・・」

自分は痛々しい日差しで目が覚めた

そしてベットから起き上がり台所に向かった

「おおおおおはよう海くん！！・・・今日の朝ごはんはパンでいいよねー？」

「ああ、おはよう夕華はまた来てたのか」

この子は日暮夕華(ひぐれ ゆうか)という幼馴染でとなりの家に住んでいる

ただ昔から近所っていうわけもあり毎日のように家にきては飯を作ってくれる

自分としては兄妹みたいなものだと自分では思ってる

ただ先日のことがなければの話だったが

自分は夕華に呼び出されてご神木といわれる大きな木の近くにきた

「あのね・・・自分ね・・・海くんが・・・好きな！！だから付き合ってください！！

」

自分は驚くことしかできなかった

春も終わりかけて夏に入りかけの時期に毎年島で行われてる

『美月祭』という春の終わりを告げる祭りがある

その終わった夜に夕華に告られたのだ

ただ自分は断る理由もなかったからいいよと言ってしまったのだ

でも自分は夕華を近くにいるからただ好きなのかどうか分からないが

夕華には悲しませたくないからと自分は思ってしまった

そんなこんなで自分と夕華は付き合ってるわけなんだが

自分は今まで通りいわば普段通りでいいと思ってる

ただ昔からの幼馴染だからこんなことを思ってしまうのだろうか

「本当に好きってなんなんだろうか」

自分はい言ってしまったが夕華には聞こえなかっただろう

「ん？海くんなんか言った？」

「別に一早く食べて行こうか」

自分と夕華は食べ終わるとかばんを持って家から出て歩いて登校した

自分の家から約30分歩いたところに美月島(みつきしま)に唯一ある高校『美月高等学園』がある  
ここは島にひとつしかない高校のせいなのか  
学園の敷地面積は大きくそして広く  
だが島の割には全校生徒が1000人近くいるという大きな高校なのだ

「海くんー今日和弥くんが練習したいから音楽室に来てねだっー」  
三井 和弥(みついかずや)というのは同じ学園の同じクラスにいる  
小学校からずっと同じクラスの腐れ縁の友達である  
そして和弥と夕華と自分で一緒にバンドをしているのである  
「あー和弥がー？しょうがねえなー授業終わったら行くか」  
眠たそうな自分は夕華にそういつつあくびをして歩いていった

教室に入るといつもとは違って朝なのにすごく騒がしかった

「おっ海と夕華ちゃんーおっはー」

「あー和弥くんおはよー」

この二人はいつもと同じで朝からテンションが高い二人だ  
ただこの二人とは違い自分は手で挨拶しただけで席に向かった

「なー海ー知ってるか？」

「なにがだよ？」

和弥は近くに言い寄ってきた

「今日転入生が来るんだっーな」

「ほー・・・だからこんなに朝から騒がしいのか」

「そうそう・・・でなー自分廊下歩いてたらその転入生を拝めてなその転入生がなめっちゃかわ  
」

「おいー朝のHRやるからさっさと座りやがれお前らー」

和弥が言い終わる前に担任の岩原先生こと岩(がん)さんが入ってきて  
教卓の前にきて話しはじめた

「おう男子お前らに朗報だー転入生がこのクラスに配属になったぞ」

男子は一気に盛り上がり岩さんは笑ってた

「うんじゃー朝比奈入って来い」

そうやって入ってきた朝比奈を見て男子は一気に盛り上がった

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおめっちゃかわいいiiiiiiii！！」  
女子もびっくりするぐらい可愛かった

「ああそれじゃ朝比奈。自己紹介をしてくれ」

そう岩さんは朝比奈に言ってはじに寄り朝比奈は教卓の近くに行った

「初めまして。朝比奈 巴(ともえ)と言います。これからもよろしくね」

巴が微笑んだ瞬間男子は更に盛り上がった

「つまそんなわけで朝比奈の席はな一・・・」

辺りを見渡し岩さんは席を探し自分のほうを見た

「そうだな・・・海お前の隣の席空席だな。しばらくそこの席に座ってくれな」

そうやって巴は自分の隣の席まで歩いてきて「よろしく」って言われた瞬間

周りから殺意が見えた気がした

そんな朝のHRが長く感じたが授業はあっという間に休み時間が来るたびに

自分の隣の席が騒がしくなりそんなこんなで昼休みになった

「やべー購買に行くのめんどくせえ・・・なあ夕華一なんか食いもん一」

「もう一そんなことを思って海のために弁当作ってあげたから食べてね一」

そうやって弁当を差し出して自分に渡し夕華は隣の席の巴に話しかけた

「ね一ね一巴さん一一緒にお昼ごはん食べない一？」

巴は一瞬迷ったがでも躊躇いもなくうなずいた

「いいよ一一緒に食べよ一」

「うんじゃこの和弥様も一緒に食べてあげよう!!」

「どこから沸いてきたんだ？」

いきなり和弥は出てきてあまりにも反応が少なかったのか和弥は悲しんでいたが

結局夕華と巴と和弥一緒に食べることになった

そして自分たちは屋上に行って話しながら弁当を食べた

「うわ一ここから見る景色綺麗だね一」

巴は柵に近づき屋上から景色を見渡した

いきなり強めの風が吹き荒れて長い髪がなびいているのを見て自分は見とれてしまった

「こーら海くん一!!なに見とれちゃってるの!!自分悲しんじゃうよ一」

夕華は顔を膨らせて自分に言い寄ってきた

「ああわりいわりい一ちょっとまぶしくてなハハ」

そう自分は苦笑いしてさっさと座って弁当を広げた

皆が座り弁当を広げて食べて自分は夕華と話をして笑ってたら和弥は問い詰めるように質問をした

「な一巴ちゃんって自己紹介は自分の名前だけだったし休み時間は他のやつと話してたけどどこから来たの？」

「あ、私ですか？音大付属倉橋学園っていうところから来ましたのです。親の都合でこちらに引っ越してきたのですよ一」

確か音大付属倉橋学園って歌とかで有名だったはずだよな

そんなお嬢様がこんな田舎みたいなところに転勤とかでくるようなことがあるのか

「へ一音大付属か一うんじゃ歌とかうまいの!？」

夕華の目がすごく輝いて見えたのは気のせいか

「私にあんまうまくないですよ」

巴はちょっと焦った感じで話しを返した

だが自分は話を流しながら夕華に話しかけた

「夕華ーこの卵焼きうまいねーごちそうさま」

自分は目の前の弁当を平らげて夕華に弁当箱を返した

すると巴がなにかを考えて話してきた

「ねーねー夕華ちゃんと赤松くんって付き合ってるのー？」

自分は飲みかけのコーヒーを噴出しそうになった

「そうそう夕華ちゃんと海は付き合ってるんだよー」

和弥は笑いながら自分を突っついてきた

「そ、そんなふうなもんじゃないもん！！あ！！そろそろ授業だから戻ろう！！」

夕華は恥ずかしがりながら逃げるように言った

「あーうんまあそんな感じだ」

自分はそう言って立ち上がって他の二人と一緒に教室に戻ってきた

そんなこんなで午後の授業も終わりあつというまに放課後になった

「海ー夕華ちゃんーそろそろ音楽室に行こうぜー」

そう言ってかばんを持って近寄ってきた

「だなそろそろいこうか」

席を立とうと自分がかばんを持って行こうとしたら巴が近寄ってきて

「私も一緒に行っていいかなー？」

別にいいけどーっていう感じで夕華も和弥もうなづいた

「うんじゃ行こうか」

そうやって自分たちは音楽室に向かった

## 第2話 入部とデート

---

自分たちは教室を出て音楽室に歩いていた

「あの皆さんって音楽室になにしに行くのでしょうか？」

自分たちはギターとベースを巴に見せつつ音楽室のドアをあけた

「まだ言ってなかったな。俺達バンドをやっているんだ」

「っそボーカルが下手なバンドだけどね・・・」

「この和弥様はドラムをやっておりますよ」

そうやってアンプを出してにつなぎ、準備を始めた

「へー・・・本格的ですね！なんか聞かせてくれませんか？」

「おういいぜー」

そうやって和弥の出だしから始まり1曲を見せてあげた

終わったと同時に巴の拍手が聞こえて

「それぞれの音はうまいですけどーやっぱボーカルがですね」

苦笑いしながらうまい具合に自分に指摘されてへこみそうになった

そこにすかさず夕華が誘ってみた

「巴ちゃん!!ボーカルやってみない!？」

「え・・・でも私まだ一回しか曲聴いてないし歌詞わからないよ？」

「歌詞ならここにありますよ」

和弥はバックの中から歌詞を出して見せた

「ほら巴ちゃん一緒にやってみよう!!」

自分は立ち上がってまた和弥から始まって巴は歌いだした

「ふう・・・」

「おー!!すげーじゃん!!巴さん!!」

自分は喜びながら和弥も付け足した

「さすが音大付属に行っただけありますね」

「ねーね!!巴ちゃんー入部して正式にボーカルにならない!？」

夕華は目を輝かせて巴の手を取って問い詰めていた

「俺からも頼むわ。俺が歌うよりすげーいいしな」

自分も若干悔しいが巴が歌うと本当にいいからいってしまった

「え、でもいいの？」

巴は困りながら3人を見ていた

「別にいいですよ。むしろ此方が貴方様に同意を求めているぐらいですからね」

和弥は笑いながら巴に言った

「なら入りましょうか」

そう言って巴は恥ずかしがりながら「よろしく」とお辞儀をした

自分は喜び夕華ははしゃいで和弥はなにを思ってるかわからないがとりあえず喜んでるようだ

「ようこそ！！俺たちのバンドへ！！」

次の日から一緒にバンド練習することにもなったし昼飯を食べるようになった

そしてバンド練習をした帰り道、自分と夕華で帰っていた

「久しぶりだね。二人で帰るのは・・・」

「あーそうだな一朝は一緒に行くけど帰りは和弥とかが毎回いたしな」

二人して坂を下りながら話していた

「そうだ明日休みでしょ？だからね・・・」

「だからね？」

夕華は顔を赤くしながらこっちを見て

「一緒に買い物しない！？」

自分にはなぜそんなに顔を赤らめて言うのかわからないが考えてみるがわからなかった

「べ、べつにそんなすごいことじゃないからね！！」

「なのか、つま明日は暇だから買い物するか」

自分は笑いながら夕華に言いすごく喜んでるのを見てついついほっとしてしまった

でも買い物と言ってもそんなに恥ずかしいことなのか

いつも買い物とか行ってるじゃないかと思えば当たるところがいくつかもあった

そんなこんなで話しながら帰りあつという間に家についた

「それじゃまた明日ね」

夕華は喜びながら手を振って家の中に入っていった

「はあ・・・なんだろうなこの気持ちは」

自分は悩みながら家の中に入りベットに横になってメールでおやすみと夕華に言い眠った

『お前はそれでいいのか？このままでいいのか？それであの子うれしがるのか？』

『なんのことだ？というかここはどこなんだ？』

その言葉と同時に自分は目を覚めた

なんというか意味のわからない夢だった

「なにがそれでいいんだ？」

携帯を開き時間を見た

【AM9:00】

たしか待ち合わせは9:30

ていうことはそろそろ出なくてはならない時間だった

「やべ！！遅れるじゃん！！」

自分は急いで顔を洗い着替えて待ち合わせ場所に行った

「わりい！！遅れた」

時間は9:30すぎて9:40だった

「もー！！だから毎日目覚ましつけなさいって言ってるじゃん！！」

自分は顔を上げてみると夕華はおしゃれをしてはつきり言えば可愛かった

「ん？なんか変かな・・・？」

「・・・あっ！？別に变じゃないよ・・・うんじゃ行こうか」

自分は夕華を引っ張って先導した

美月島は島ながらも観光地なので街までいけばいろいろと遊べるところがある

でもさすがに観光地だから人は多いけどね

「あれー？海くん、あれ巴ちゃんじゃない？」

自分は夕華の指差したほうを見てみると巴が変な人に絡まれてるところを見かけた

ここでどうすればいいんだ？と考える前に体が勝手に動いた

頭では選択肢は助けるしかなかったのだろうか

そして巴の前にきて

「そこのお前、こんなところでナンパですか？」

「は？誰だよお前、お前なんかに用なんかないんだよ。どけるよ！！」

男は案の定殴りかかってきた

だが自分は昔からなぜか教われた護身術の力を発揮した

自分は拳をよけて足掛けをして転ばせた

「お前には勝ち目ないので逃げたらどうですか？皆さんに笑われますよ？」

自分は男を見て問い詰めた

「それとももっと恥さらしにしましょうか？」

男は立ちあがり悪者風に『覚えておけよ！！』とベタすぎる言葉を言って逃げて行った

「大丈夫？巴さん」

「大丈夫ですけど、ありがとうございます」

巴は頭を下げて自分にお礼をした

「海くん早すぎる！！巴ちゃん大丈夫？」

「大丈夫ですよ、夕華ちゃんもありがとうございます」

夕華ちゃんはでへへとなにもしてないのに自分が活躍したような気分になったのか照れてた

「それより巴さんはここでなにしてるんですか？」

自分はそんな夕華を無視して巴に質問をした

「買い物をしていたんですよ。でもここらへんまだわからないので少し悩んでいたら変な男の人に絡まれて」

「なるほど・・・っまあの男はもういませんし、そうだ！！街案内してあげるよ」

夕華はまだ照れていたが今話を聞いて少しびっくりしていた

「夕華もそれでいいだろ？巴さんが悩んでいるし夕華も心配だろ」

「そうだけど・・・そこまで言うならね、巴ちゃんのためだしいいよ」

「ありがとうございます！」

自分はなんか巴の笑顔を見るたびに安心してしまう

なんというか自分ながら悪いことしてるなと夕華に誤りたくなった

「で、巴さんはなにを求めていたの？」

「えーとまずは食器類でしょうか」

「なら、あそこの露天とか見てみるか」

自分は露天が開いているところに行って

食器とかを見たり巴にも見せたりして

面白いものを見つけたら笑って見せ付けたりして

時間が過ぎていった

たまに夕華のほうにも振ったりするが

夕華は朝より元気がなくなっていた

自分にはわからないがあっというまに夕焼けが沈み月が見えてきた

「そろそろ時間も遅いし帰るか」

そう言って巴を家に送っていき

「ありがとうございました！！今日は楽しかったです」

そういい残し部屋に入っていった

そして自分は夕華と一緒に帰っていて

「夕華ー今日は楽しかったなー」

「うん」

「そーだな今度は和弥も誘って皆で遊びに行くか」

「うん」

「どうした？夕華元気ないな」

「・・・」

夕華は沈んでいた

自分は疑問しか生まれなかった

「あ、ありがとうね今日は楽しかったよ・・・また明日」

「あ・・・ああ、また明日朝起こしてくれよ」

そう言って夕華は家の中に入った

自分はなんであんなに沈んでいるのかがわからなかった

そして自分は家の中に入り晩飯を食べてギターの練習をした

「はぁ・・・自分で思い切って誘ったのが馬鹿みたいだった・・・」

私は悩み続けた

「付き合うってこんなものなのかな？」

私は一晩中悩み続けた

### 第3話 海とぎこちない雰囲気

---

暑い夏に心地よい潮風

そして自分の名前にもなっているところにきている

それは海だ

自分のはのんびりしたいほうなんだがなんでここに来ているのかがわからない

「あー・・・暑いな」

自分はパラソルの下に寝転がり考えた

あれは和弥が言い出したばかりにだ

「さて暑いし暇だし海でもいきましょうか」

『え！？』

皆揃って和弥のほうを向きなおした

アンプのボリュームを下げずに抜いたせいで大音量の騒音が出て耳が痛くなった

「なんでいきなり！？」

自分は片方の耳を抑えながら和弥に聞いた

「そうですね・・・ちょうど親に旅館にきてくださいと言われてたんでどうです？いきませんか？」

自分はまだ耳が痛いけど巴と夕華は揃って

『いくいく！！4人でいこう！！』

これが始まりだった

美月島には電車で一時間乗ったところに砂浜があり観光地でもあるから旅館もたくさんある

和弥はその子供で今回は御呼ばれしたそうだった

次の日に皆は駅で待ち合わせして

電車に乗り込み1時間はしゃいでいた

「海くんー海楽しみ？」

夕華は喜びながら自分に言ってきた

「あーうん楽しみだな皆と遊べるし」

「私は海くんと海にいけるが楽しみ！！」

純粹に喜んでる夕華を見て最近心は痛む自分があるのがわかった

そして1時間電車の中で話したりしてあっという間につき

旅館に荷物を置き海で遊んでいるわけだが

(なんていうか水着姿もいいものだな・・・)

「海くんよ！！女子の水着姿って最高だな！！カメラ持って着てよかったと思った私がいる！！」

」

和弥がいきなり目を輝かせながらカメラを連写していた  
それを見た自分は海に和弥をほうり投げた

「！？ぐは！！海くん焼きもちですか！？ちょまじで死ぬって！！」

自分は和弥を沈めようとしたがカメラは防水だったためカメラだけは無事だったようだ

そして一旦旅館に皆で戻りそのあと温泉に入っていると

「さぁ海くん！！温泉といたらなんだかわかるかね？」

こいつは懲りずになにかをやろうとしていた

「和弥・・・俺に安息はないのか？」

「こんな時に安息なんて！！この時間に入るのって僕ら以外いないようにしてるんだよ！！」

「だからなんだよ・・・俺はなゆっくり温泉に入りたいんだよ！！」

昼間和弥を沈めるためにいろいろやって疲れてるからでもあった

「まぁそれもあるがやっぱり覗きだろ！！ということで連行」

「ちょっとまって！！お前一人でいけよ！！」

自分は連れて行かれ塀を無理やり上らされると

目の前に巴の顔があった

「やっほー海くんまさか覗きにきたの？」

その声を聞こえたのか和弥は自分を置いて逃げていった

「アディオス！！海くんのことは忘れないよ！！」

「ちょっと待てや和弥！！」

自分も逃げていった

「どうしたのー？巴ちゃん」

「なんでもないよー夕華ちゃんー」

そうして自分たちは風呂から出るのであった

出て部屋に戻る途中巴と会った

「あ海くんちょっといいかな？」

自分は若干後ずさりながら巴の話を聞いた

「さっきのこと秘密にしといてあげるよー」

「本当か！？」

「ただし条件付きー」

自分は条件付きと聞いたとたん「うっ」って言ってしまった

「で条件ってなんだよ・・・」

「これから一緒にお土産を買うからついてきてくれるかな？」

「あ？それだけでいいのか？」

「それだけって・・・まだもっと言って欲しいの？」

「いえ同行させていただきます！！」

自分は他の条件がつく前に一緒に行くことにした

「あれ？海はどこにいるの？和弥一」

私は海と一緒に買い物いこうと探してた

「知らないですね。どこか歩いてるのではないのでしょうか？」

「ありがとうね。自分探してくるね！」

私は旅館を飛び出してまずは海へ行き

そしておみやげがたくさんある商店街へと歩いていった

さて巴と一緒に買い物しているのだが荷物持ちだとわかった自分はなぜか疲れがどっときた

「あの巴さん？あとどのくらい買うのでしょうか？」

自分は両手一杯に袋を持って巴に聞いた

「あとあそこの店だけかなー？㍻㍻」

「あの㍻㍻って今聞こえましたよ？明らかにいじめですよね？」

「いえ別にそうではないですよ。ただ自分だと手にもてないので誘ってよかったです」

自分はすごく落ち込んでしまった

「あ、でもそろそろ帰りましょうか」

「おねがいします・・・」

自分にやっとで休憩が与えられると思うと少しうれしかった

私は商店街に行って探していると巴を見つけた

「とも・・・」

呼ぼうとしたら一緒に歩いて笑ってる海を見つけた

そして黙ってその後ろをついていった

海へ向かってるのをついていった・・・

そして私は見てはいけないものを見てしまったかもしれなかった

私にはもう見せなくなった笑顔を・・・

「それはないでしょ」

自分は久々に笑ってるかもしれない

「でしょでしょーだからちょっと思ったの」

巴の話を聞いてると自然と笑ってしまう

この時間が長く続けばいいのにと心から思ってしまったのだ

そのとき夕華を見つけた

「おう夕華ーあのさ巴がさー」

といいかけた時

「あーお邪魔だったかな？先に戻ってるね」

そう言って夕華が走っていった

「ちょっとやばいかしら・・・」

自分は理解できなかった

「なんのことだ？俺はただ荷物持ちにしか見えないと思うが？」

「なんていうか鈍感ね・・・とりあえずあとで誤っておきなさいよ？」

なんで誤るのかわからないが誤ることにした

そして部屋に戻ると和弥が「花火をしようか！！」と喋ってきたから

夕華と巴を誘って外に出た

色とりどりの花火を見ていた夕華に自分は近寄った

「あーさっきはなんかごめんな？俺がなんかしたかもしれないから一応誤るな」

本当になにをしたかわからないからこんなことを言ってしまった

「うん・・・別に怒ってないよ・・・ほら花火楽しもう」

元気で見えているように見えたがどことなく元気ではない夕華だったが自分は気づかずにそのまま花火をした

そして時間はすぎ旅館の中に戻り眠るのであった

【お前は誰が好きなんだ？】

【俺は・・・誰が好きかわからない・・・むしろ好きとはなんなんだかもわからない】

【好きというのは教わるものではない感じるものだ】

【どういうことだよ？】

【ただ今のままではなにも得ることはできない・・・だがお前にはお前の答えがあるはずだ】

【おい本当にどういうことだよ！？】

【自分には感じてないまたは気づいてないだけだがきっとわかるはずだ】

「おい！！待てよ!!」

夢を見た自分は起き上がった

「またこの夢か・・・」

自分はこの夢を見るたびに変なことを思うようになった

「好きとは感じるものか・・・」

自分はまた眠り朝になった

## 第4話 助けと与えられた希望

---

海での遊びは楽しかった

だがそれと反面、自分がすべきことがわからなくなってしまった  
家に帰る途中夕華と一緒にデートすることにした

「あ、おはよ海・・・」

なんか夕華は元気ではないようだった

「おう夕華おはよう、今日どこに行く？」

「海に任せるよ」

そうやって自分たちは歩いていった

「あー！！学校に忘れ物しちゃった」

私は家に帰ってきて宿題をしようとしたがノートを学校に忘れてきたのに気づいた  
学校は夏休みだから開いてるかどうかわからないけどあれがないと宿題にならないので  
学校へと向かった

「おー開いてた、やっぱ部活とかあるからかな？」

私は喜びながら教室へと向かいノートをとると違うクラスの子達と会った

「あー巴さん、ちょっと屋上に来てもらえるかな？」

「いいけどなにか用かな？」

私は別に気にもせずと一緒に歩いていった

「うん、ちょっと話したいことがあるの」

「おーこれがうわさのビックパフェか」

自分はテレビで映ってたレストランにきて夕華と一緒に昼飯にしようとしてた

「なんていうかでかいな・・・」

目の前にはでかくて一人で食いきれるかどうかわからないものを見ていた

「で大丈夫なのか？夕華、無理そうなら俺も食べてやるぞ」

「たぶん大丈夫・・・たぶん」

なんか弱気の夕華を見て自分は早めにハンバーグを食べ終えようとした

「うまいねー大ききのわりに意外とスプーンが進んでいくー」

自分は早めに食べてたつもりだけど

高いパフェがどんどん減っていくのを見て唖然してた

「夕華・・・そんなにうまいか？」

「うん、うまいよー。それに大きいと思ったけど意外と食べれそう」

自分はただただ啞然していた

そうして夕華も食べ終わり会計を済ませた

「ハンバーグセットとビックパフェで2050円です。ありがとうございました」

意外と安いのもびっくりだったが

やっぱり一人で食べてしまう夕華にもびっくりだった

「さて食べたしこれからどこに行くかなー」

「海の好きなところでいいよ」

自分はうれしそうな夕華を見てほっとした

朝はあんまり元気ではなかったからだ

いろんな店に行って遊んであっというまに夕方になった

「さて、次どこいこーかな？」

「だねー自分行きたいところがあるの」

そうやって自分は夕華についていった

だがその場所に行く途中携帯が鳴った

「夕華ちょっと悪い、電話だ」

そうやってディスプレイを見ると

巴の名前が出てた

「はい、海です」

「・・・・・・・・・・」

何を言ってるかわからないほど小さな声だった

「どうした？聞こえない」

「海くん・・・助けて」

「え？どうしたんだ！？巴」

巴と言ったとたん夕華がこっちを向いた

「巴ちゃん？どうしたの？」

不安そうな顔で自分に問いかけた

「海くん助けて！！怖いよう・・・」

泣きそうで震えてる声でした

「今どこにいる！？」

そういうと電話がフツと切れた

「悪い・・・夕華デートはこれで終わりだ」

「どうしたの？！海！！巴ちゃんがどうしたの？！」

「知らない、ただ助けてとしか聞こえなかった」

自分は少し動揺した夕華を落ち着かせようとした

「海は助けに行くの？」

「ああ」

「海は私と巴ちゃんどっちが大切なの？」

これはすごい質問だ

夕華は夕華で幼馴染だし大切だ

だが巴は同じバンド仲間でなぜか助けてやりたいと思うやつだ

比べることができないものだが

ここは「夕華が大切だ、だが助けてと言われて助けないやつはいない」と言えばいいのだが

自分は言えなかった

夕華の思ってる大切とは違うと感じたからか？

自分はなにも言わずに走っていった

「海！！」

夕華が叫んで止めようとしてたが自分は止まらなかった

「くそ、巴はどこにいるんだ？家か？とりあえず和弥に聞いてみるか」

自分は和弥の家に行き巴の家を聞いた

だが家にはいないと巴の親に言われたが学校に行くといってたみたいだった

そして自分は学校へと向かった

途中幻聴が聞こえた

【なぜお前はそんなに必死になって助けようとする】

「そんなの決まってるじゃないか泣き声で助けてといったら助けないやつはいない」

【そうかだが、お前はなぜあの時は言わなかった、そう言えば悲しませずにすんだはずだ】  
たしかにそうだった幻聴が正論を言っていて行っとしたが

「確かにそうだがあの質問でそう言っているのか悩んだんだ。夕華は大切だ。だが巴も大切だ」

【そうか・・・ならお前は答えを見つけ出せるだろう、私の出る幕はもうないことを願いたい】

「答えってなんだ！？」

自分は走りながら叫んだ

今の時間学校から帰る人とかがいなくて助かったと思う

そうして学校につき教室へと向かったが

誰もいなかったが巴のバックが置いてあった

「学校にまだいるようなのか」

自分は体育館へと向かった

私は見捨てられたのだろうか？

「巴ちゃんがなにか起きたようだけどなんで私はあんなことを聞いたんだろ？」

私は悔やんでいたが同時になにもしたくなかった

「私が思っているより恋愛って難しいものなのかな？ただ好きだけってだめなんだろうかな？」

家へと歩いて帰っていった

(海くん・・・助けて・・・)

私は心の中で叫んだ

それもこれも屋上に行くといきなり誘った女子が態度が変わったかのように押してきた

「まじでちやほやされて調子に乗ってんじゃねーよ！！」

そう言われて私は屋上に閉じ込められた

中学校でもこういうことがあった

ただ自分は過ごしているだけなのに

なぜか女子達には反感を買うようだ

前はアイドルみたいな男の人に告られて断わった

それだけのことでそれを見た女子がうわさを一気に流して

上級生に体育館の倉庫に閉じ込められた

その時はたまたま見回りの人が来たおかげで助かったようなものだ

(もうやだよ・・・こんなの怖いよ・・・)

さすがに1回目も怖かったから

私は恐怖しか生まれなかった

(海くん・・・私はここだよ・・・助けて・・・怖いよ)

私はただただ泣いていた

「くそ、体育館にもいないのか？もう一回電話をかけるか」

アドレス帳で巴の名前を探して電話をした

すると聞き覚えのある着メロが流れた

「あ！！あそこか！？」

自分はその音を聞いて屋上へと向かった

向かってる時巴が電話に出た

「待ってる！！今助けるからな！！」

巴は震えてるのかどうかわからないが「うん」という声が聞こえた

そうして自分は屋上にたどり着いた

だがドアの前はバリゲートなのか机が重なってた

「ここまでやるか？普通」

自分は呆れと同時に一気に崩しにかかった

「巴！！大丈夫か！？今助けるからな！！」

「海くん！？助けにきてくれたの？！」

鍵もかかっていた

よくここまでして閉じ込めるよな

「巴ちょっと離れてろ！！」

自分は距離をとったのを足音で確認して机を使いドアを叩き壊そうとした

「くそ！！開けよ！！！！」

自分は必死になった

夢に出てきた言葉を思い出した

【自分には感じてないまたは気づいてないだけだがきっとわかるはずだ】

自分は巴のことが大切なんだな

【そうか・・・ならお前は答えを見つけ出せるだろう、私が出る幕はもうないことを願いたい】

(ああお前が出る幕はもうないな自分は答えを見つけたんだからな)

そういい思いっきり机をドアに叩き続けた

(だがたぶんお前にはまだ助けてもらう時があると思うんだよ)

【どうせあいつとのことだろうが、いいだろうだが今この状況を解決させろ】

幻聴が後押しをしてくれてるような気がした

机をもう一度叩くとドアが開いた

「巴！！」

ドアを開けて巴のいるところに走っていった

「海くん！！」

そう言って巴は自分に抱きついてきた

「怖かったよ、助けに来てくれてありがとう」

巴は泣き続けた

すると疲れたのか巴は眠ってしまった

「おいおい、まあ怖かっただろうな・・・とりあえず家まで送るか」

そう言って自分は和弥に電話をして

和弥と一緒に家に送ってやった

そうして自分は家へと向かった

「さて、夕華は家に帰ってるかな」

自分は夕華の家へと向いインターホンを鳴らした

「はい、海どうしたの？」

「ああ夕華か、ちょっと話があるんだが」

そう言って夕華を呼びご神木あるところへと向かった

その途中、夢にも出てきたあの声と幻聴が聞こえた

【お前の答えはこれか？】

(ああ、けじめはもうついた、俺は好きという言葉履き違えてたようだ)

【私はこの答えが出るのを待っていたのだよ】

(だろうな、だから夢とかにも出てきたんだろう？この野郎が)

【ふふふ、なんのことだろうね？】

夕華と一緒に歩いているが声を一切出さないでいた

【とりあえず君の本音をぶつければいいのだよ】

(ありがとうな、今までお世話になった)

【楽しかったよ君に夢に出れてよかった、だが高この気持ちはいい体験だ、忘れるではないぞ】

(ああ、きっと大事な思い出だろうな!!!)

ちょっと笑ってしまった

「どうしたの、海？」

「いや別にな、そろそろ着くな」

そう言って鳥居をくぐっていった

## 第5話 それからと未来へと

---

自分は鳥居をくぐり神社の裏のご神木の前に立った

「ここだな、夕華に告られたのは」

「そうだね・・・」

さすがに行く場所がわかったのかどうかわからないが夕華は涙目になった

「だよ、海はもういいんだよね」

自分は夕華のその言葉にびっくりした

「どういうことだよ?!」

「私はただ想ってたのと違ったみたい。。。」

違う、言ってることが違う

「さて夕華、落ち着け俺はお前に、俺がお前に言いたいんだ!!」

「だって!!」

いい加減にしろ! 心の中でそう叫ぼうとしたが

さすがにやめといた

「いいから聞いてくれ」

そういうと周りが一気に静まったように感じた

ただ聞こえるのは枝が揺れて葉がぶつかり合い鳴る音だ

「落ち着いたか?夕華」

「うん、ごめん」

そうやって自分は深呼吸をした

「それじゃ言うね」

とりあえず言うことは言う本音をぶつけるんだ

「俺はお前のことが大切だ、だがこの大切というのは俺はお前の幼馴染で兄弟みたいなものだからだ」

「だがお前から告られたときは、正直言えば不安だった」

「断わる理由もないから素直にうなづいてしまった。それは夕華には悲しませたくないからと想ったからだ」

自分は一区切りをつけた

まずはここまでだ

夕華は少しうつむいてるようだ

そして自分はまた始めた

「お前と付き合っていて楽しいとは思う、だが本当に俺は夕華が好きなのかって思うと不安だった」

「たぶん信じられないと思うが、夢や幻聴で言うてくるんだ」

「お前はそれでいいのか？」

「たしかに俺はこのままではよくないと思う」

「で、俺は巴に助けにいったら？」

そういうと夕華はうなづいた

「そのとき俺は夕華を思う大切さを知った」

「そして俺は好きという言葉履き違えていた」

「好きというのは、心の底から助けてやりたい、守ってあげたい、素直な気持ちをぶつけない」

「そういうことが好きだということだ」と

そうだ、自分の今までの好きはただ悲しませたくないだけだった

別に助けたいとかは思わなかった

おかげで気づけた

「本当にお前のおかげで大切なことに気づけた」

「ありがとうな」

自分はそういうと夕華は泣きながら言った

「ずるいよ」

「ああずるいかもしれないな」

「海は鈍感だけど誰にも優しくて皆が頼りにするような人だもんね」

そうやって夕華はなにか吹っ切れたように笑った

「うん、海とは終りにしようか」

「うん、だけど付き合う前と同じような感じでいような、それにバンドもまだやりたいしな」

夕華は笑った

「ずるいけど私はそういうところを好きになったんだもんね。バンドも続けようね」

そうって自分達は家に帰った  
そうして自分は眠りにふけた

【お前の勇士は見届けた】  
(なんかお前は最近頻繁に出るよな)  
【ああお前のためだからな】  
(それはありがとうございましたー)  
【だがお前はこれからどうするんだ?】  
(とりあえず文化祭を終えてから考えるよ)  
そうだ、来月9月は文化祭だ  
【ふむ、とりあえず文化祭に集中する気にいるのか】  
(ああそれから考えてみるよ)  
【いい答えだ、今度は自分からがんばるところ、かっこいいね】  
(照れるじゃないか、むしろお前って誰なんだ?)  
毎回夢に出てくるだけではなく幻聴まで聞こえるから気になってしかたがない  
【それはな秘密だ。だが身近な存在かもしれないな】  
(身近な存在? まあいいかももう夢とかには出てこないことを祈るよ)  
そう言うと目が覚めた  
「こいつのおかげで助かったもんな」  
時計を見ると7時だった  
「とりあえず起きるか」  
顔を洗いトースターを焼いていると  
ベルがなった  
「海一学校に行こうー」  
今日から始業式で学校に行くのだ  
「ああ今すぐいく」  
トースターからパンを取り食べながら学校へと向かった

学校に着くと始業式で1時間目はLHRだった  
委員長が黒板の前に立ち文化祭でなにをするか決めようとしてた  
なるほど、演劇か露天か  
「赤松で最期だぞ?」  
黒板を見ると自分で決まるような感じだった  
「あー・・・そうだな自分は演劇がいいかな?」  
はっきり言えばどっちでもよかったが  
女子達の目が痛かったから演劇にした  
「ではいきなりですけど配役も決めましょう」  
ふむふむ、主人公とヒロインと他数名か。。。

なにをする気だろうか？

「とりあえず主人公は赤松でヒロインは巴さんでいいでしょうか？」

うんうんヒロインが巴か、いい配役だな

「ん？なんで自分が主演なんだ？」

「ああそれなら私が押しといたのさ」

和弥が胸を張って言ってきた

「なんでだ？和弥、お前は俺を裏切るのか？」

「いやいや、顔的にも海がいいし今回の話は私が作ることにしているからいい配役だと思ってるよ」

黒板には作者「三井 和弥」になってた

なにを作るんだ？

「なーに難しいことではない、ただ白雪姫を改造した感じにしようと思ってるだけだよ」

心を読んだのか？！

でも和弥が作るならすごいことになりそうだなと思った

意外にも和弥はなんでもできるやつだからいいかもしれない

「とりあえず今決まったことは次のLHRの時にまた打ち合わせしますからね」

委員長がそういうとチャイムが鳴った

そうしていつものように音楽室へ行き皆でご飯を食べて

いつものように皆で帰った

そういつものような生活に戻ったのだ

## 第6話 文化祭当日

---

「悔いが残らないようにがんばろう！！」

円陣を組んで掛け声で劇が開始された

文化祭まであと数日になった

自分はただただセリフを覚えるのに忙しかった

美月高等学園の文化祭は2日行われるため

1日目はとくになにもしなくてもいいのだが

2日目は午前に劇、午後にバンド演奏をやる予定である

「この日程で大丈夫なのか？」

自分はただため息をつくしかなかった

「海くん、次のセリフ忘れてるでしょ？ため息ついてる暇があったらセリフ覚えなさい」

目の前には巴がいてお互いにセリフチェックをしていた

「だー！！休憩だー！！」

そう言って自分は教室から抜け出した

「だりー・・・なんで主役なんかになったんだよ・・・」

自分は中庭のベンチでうなだれてた

休憩して教室に戻りまた劇の練習をした

そして夜にはバンドの練習でこれがここ最近日常へと変わってきた

だがあっというまに文化祭1日目も終わり2日目へとになってしまうのだ

「やっぱ劇とか無理だ・・・」

自分は袖の裏で観客が一杯になってるのを見てため息をついた

「がんばろうではないか」

和弥の声援があってもうれしくはないものだ。。。

「それとお前に伝えたいことがあるのだ」

「なにをだよ？」

「今回の台本なんだが、お前をモデルとしているんだ」

自分は疑問しか浮かばなかった

「どういうことだ？」

「ああ、さらに言うと白雪姫なんて所詮口実だ。本当はお前自身にあった出来事を昔風にした」

さらに疑問でしかならなかつた

「だから好きなように言葉をいれてもいい。お前の気持ちをぶつけてくればいいのだよ」

そう言って和弥は皆を集め円陣を組んだ

「さて今までお疲れ様です」

自分がなぜか音頭をとる

「悔いが残らないようにがんばろう！！」

「オ——————！！」

そうして物語が始まるのだ。

ナレーターの声とともに暗幕が開いた

---

これはとある国の王子の物語です。

王子は17歳にもなったがまだ結婚もせずにとだただ遊び、一日を過ごしていました。

それを不安に思った王様は、王子の許婚を呼び早く結婚するようにしました。

「おお夕姫よ、お久しぶりじゃのお。」

「いえいえ、お久しぶりです王様。で、御用とはなんでしょうか？」

「そのことなんだがな。そちは海の許婚じゃろ？だからそろそろ結婚してもいいと思うのじゃ」

王様は困りながら夕姫に問いかけるのです。

「私は賛成ですけど海様が結婚を納得するかどうかはわかりませんよ？」

王子は夕姫が思っているよりも結婚についてはなんも考えていないのです。

その王子はいつものように農民の衣服を身にまとい、街へと行くのです。

「見かけない店だな？寄ってみるかな。」

黄色いテントみたいな建物の中に入っていくと水晶玉を見つけました

「ようこそ、王子様。そろそろ占いにくるとわかっていましたよ」

一瞬にして王子だとばれてしまいびっくりをした王子でした。

「なぜ私は王子だと分かったのだ！？」

「とりあえず私は占い師だからかのお？まあ占いにきたのじゃろ」

王子はなにも言えなくなりただうなづきました。

「おぬしはきつといい出会いをするじゃろう。そして運命的なことがおきる」

「どういうことだ？」

「意味などしだいにわかっていくものじゃよ。」

そういうと占い師は消えてしまい王子は視界が暗くなってしまいました。

「あの？どうしましたか？具合でも悪いのでしょうか？」

王子は体を起こすと見慣れないところに寝転がっていました。

「ここはどこなんだ？」

「ここは森の川辺です」

少女がそういうと起き上がりました。

「別に悪いところはない。それとお主は誰だ？」

「私は巴姫と申します。今は森の家に住んでいますけど。貴方は—」

「海だ。よろしくだ。」

そう紹介をして巴姫のことについて聞いたりしているうちに日が暮れてきました。

「私はこれで帰るとする。ありがとうな」

私は歩いて城へと戻るのであった。

次の日もまたその次の日も、王子は巴姫に会いに行くのでした。

だがそれに疑問を持った夕姫は鏡を使い王子の行き先を知るのです。

「鏡よ鏡よ鏡よ・・・海様、王子はどこにいつも行っているのだ？」

すると鏡は声を発しました

「海様はいつも森の家に住んでいる。巴姫に会いに行っているのです」

「私と巴姫はどちらが美しい？」

「それは巴姫でございます」

逃げるように鏡は元の鏡へと戻りました。

夕姫はこのままでは、王子が取られると思い毒リンゴを買い巴姫に食べさせようとするのです。

そして夕姫は森の家へと行きました。

「そこのお嬢さん。リンゴはいかが？」

「えーと。ありがとうございます。あの人喜ぶかなー？」

「おっとお嬢さん。このリンゴは貴方が食べなさい。新鮮じゃからのお。。。」

そう言って夕姫は城に戻りました

巴姫は言われたように家の中に入りリンゴを食べるのです。

そしてまた森の中に歩いていくと毒が回ったのでしょうか、倒れてしまったのです。

「ハハハ!!これで王子は私のものだよ。」

笑い声とともに城へと戻っていきました。

王子はこのことは知りません。

なのでいつものように森の川辺へと行ったり家に行ったりするのですが、

巴姫とは会えないのです。

日も暮れてしまい王子は城へと戻るのでした。

次の日、王子は目が覚めると同時に森へと行こうとしました。

「おはよう、海様。そろそろ結婚のほうなんですけど」

「私は結婚などせぬ!!わかっているだろ」

そう言い王子は馬へと乗ろうとしました。

が、夕姫に止められるのです。

「行くところは巴姫のところでしょう。」

「なぜそのことがわかる!？」

「残念ながら、行かせませんよ?むしろ巴姫は死んでしまったのです。」

「なぜ死んだのだ!?生きておるだろう!!」

「いいえ死にました。私には魔法の鏡があるのですから。」

王子は馬に乗りすぐに森へと行きました。

森の奥から、小人たちの声がするのです。

「姫様が殺された。毒リンゴを食べさせられて殺された。生き返るためにはどうすれば？」

王子は巴姫の近くに行き声をかけたが返事はありません。

「どうすれば、どうすればいいんだよ！？」

するとどこからか声が聞こえます。

「いいかい？王子よ、巴姫はこの通りだが。助けるのは貴様の手が必要なんだよ。」

「どうすればいい！？」

その声の通り薬草を集め薬を作り上げました。

「そうしてそれを口移しで飲ませるんだよ。」

王子はすぐにしました。すると巴姫は見る見るうちに顔色も戻り、生き返りました。

「巴姫!!」

王子は巴姫を抱きしめました。

---

そうしてクライマックスへに行く予定だが、自分は和弥の声を思い出した。

「だから好きなように言葉をいれてもいい。お前の気持ちをぶつけてくれればいいんだよ」

そうか、確かに自分の物語だと感じる

(なら俺は俺の言葉で結末を迎える)

和弥も察してライトの切り替えを止めていたため不自然に間が空いてしまい

観客はざわめきだした

自分は深呼吸をした。

(大丈夫だ、自分ならやれる)

---

「巴姫。俺はお前が好きだ。だからお前を一生大事にしたい。」

王子はそういいまた抱きしめ城へと連れて行き結婚するのでした。

王子の物語はこれでおしまい。

---

暗幕が閉じると拍手が鳴り響いた

「おつかれさま！！」

素晴らしい劇が終わった

自分も納得できるような劇になった

「本当におつかれさま」

自分たちは次はバンドがあるため急いで音楽室へと向かった

## 第7話 決意と結末

---

自分たちは音楽室でひたすら演奏を練習した

「これで一通り大丈夫かな」

「あ！海くん、そろそろ時間だよ」

自分は時計を見ると2時をさしていた

「そろそろ体育館に行こうか」

体育館に急いで向かうと1つ前に演奏が終わっていた

ここから30分休憩して自分たちのバンドの番だ

「よし、そろそろ自分たちの番だな。劇とは違った盛り上がりを見せよう！」

巴の顔が赤くなるのを見えたがすぐ深呼吸して調子を整えた

「それじゃ、いこうか」

あっというまに時間になりバンドの演奏を始めた

演奏はあっという間に終わり盛り上がった

自分たちの文化祭は終わった

演奏が終わったあと4人で文化祭を回り楽しんでた

「これにて美月高等学園文化祭を閉祭します。一般の方々はお忘れ物がないことを確認の上お帰りください」

「なお生徒の皆様は夜7時から行われるキャンプファイヤーにご自由に参加してください」

放送とともに文化祭が終わったことを感じた

だが自分にはまだやるべきことがある

自分は巴にしか聞こえないように話しかけた

「なあ、巴」

「なに、海くん？」

「9時ぐらいに屋上に来てくれないか？」

「うん」

巴と約束をして一旦皆でキャンプファイヤーを行う校庭へと向かった

さすがに全校生徒が多いだけあって夜に残る生徒も多かった

少し離れたところで自分たちは一旦座り思い出にふけていた

「劇も成功したしバンドも成功したしあとはもう今年の文化祭に悔いはないな」

自分は星を見ながらつぶやいた

「だがお前にはやるべきことがある」

和弥が付け加えるように話した

なぜ和弥が知っているかはわからないが自分はその場から離れることにした

「俺このあと用事あるから、また明日な」

「じゃーねー」

皆は手を振って送ってくれた

自分には和弥の言ったようにやることもある

そう巴に本当のことを話す

本音を話す

自分は屋上へと向かい星を見上げた

(やっぱり綺麗な星だ)

ひとつひとつが輝いていて幻想的な空だった

星を見ているとドアが開いて人が入ってきた

「海くんどこにいるのかな？」

巴の声が聞こえて自分は手を振った

「ここにいるぞー」

そして巴は自分の隣に座った

「なにしてたの？」

「星を見ていた」

そういうと間が開いて少し話しづらくなった

だが自分は言わなければならない

「巴」

心臓がバクバクとなっている

(大丈夫だ。自分なら言える)

「俺はお前に言いたいことというか伝えたいことがあるんだ」

自分は深呼吸をして立ち上がり巴の前に立った

「俺は、巴のことが好きだ。付き合ってくれ」

誰もいない屋上に自分の声が響いてるのがわかった

だが後悔はない

本当のことを、自分が気づいたことを言うからだ

「俺は最初はただ巴と夕華と和弥といればすごく楽しいとしか思わなかったんだ」

「だけど巴が街で絡まれてたり、屋上に閉じ込められたときに思ったんだ」

「俺は夕華とは違った感情を巴に持ってるいるのではないか、と」

「そして俺は巴を助けてやりたい。助け出したいと心から思った」

「夕華と付き合っていて不安なところはあった」

「中途半端な気持ちで好きでいてもそれは表面上しかない好きだ」

「だから付き合っても意味がない」

「心から想うからこそ好きでいられるし大切にもできる」

「だから、俺はお前のこと、巴のことが好きなんだ」

自分はもう十分に言えた

満足できる。納得もできるぐらい

巴からは涙が出ていた

「私も絡まれてる時は誰かに助けて欲しいと思ったよ」

「でもね屋上に閉じ込められた時は海くんに助けて欲しいって心から願ったの」

「海くんが誰にでも優しいのは一緒の空間にいてわかる」

「そしてこういうふうに言われて私はうれしいよ」

自分は巴に抱きしめられた

「ありがとう言ってくれて。私も海くんのことが好き」

そして自分も巴を抱きしめた

秋空に星が輝き校庭では盛り上がっている人達がいる

肌寒い風は自分にとっては温かい風としか感じなくなった

自分と巴は付き合うことになった

屋上から降りると10時を回っていた

巴を家まで送り、自分の家に着くと11時になっていた

携帯で巴にメールをするのが恥ずかしかかったが返信されてくると

心が温まるように感じた

そして自分は眠りにつくとも夢を見た

【おめでとう】

(お前かよ)

夢の中ではいつも教室がメインだったが今日は屋上だった

【俺は見ていたよ。お前は答えが見つけれよよかったとでも言おう】

(好きという言葉、俺は勘違いしていたがお前と会ったり巴のおかげでわかったんだよ)

【それはよかった】

そうして巴と見た星空をまた見た

(で、今回は何のようだ)

【お前に伝えておくことがあるんだよ】

(珍しいな。今まではアドバイスみたいな感じのやつしか話さなかったのにな)

【そりゃあ俺は人間だからな。で伝えるというのはもうお前とは会うことはないことだ】

(そうだな。そりゃあ夢の中か幻聴だもんな)

【いやそういうわけではない】

自分は意味がわからなかった

幻聴や夢の中ではないところでもう会えないとはどういうことなのかが

【本当のことは実際に会って話そうか】

そういうと自分は目が覚めた

「どういうことなんだ？」

夢のせいで少し目覚めが悪かったが時間を見ると[7:30]を回っていた

今日は片付けがあるため9時には学校へといかなければならなかった

「巴の家に行ってから学校に向かえばちょうどだな」

自分は制服に着替えて巴の家に向かった

巴と一緒に登校してたわいもないことを話したりしてるとあっという間に学校に着き  
教室へと向かったが教室はいつにもまして騒がしかった

「どうしたんだろうな？」

巴と一緒に急ぎ足で向かうと和弥を中心にクラスメイトがたかっていた

「どうしたんだ？」

自分は人を掻き割って和弥に話しかけた

「ああ、海か」

和弥は自分に気づいたがなにも話さなかった

時間だけがたつだけでなにも話さない和弥と自分がいた

学校のチャイムがなり担任の岩さんが入ってきて皆は席に座った

「よーし皆座ってるなー？和弥ちょっと前にでろー」

そして岩さんは和弥を呼び出し和弥は黒板の前に立った

自分にはよくわからない状況だった

「和弥は本日を持ってこの学園とはおさらばだ」

さっきクラスで騒いでたのはこのことだったのかと自分の頭で結びついた

「ということだ。今まで俺とクラスメイトでいてくれてありがとう」

そういうと和弥は自分呼びつけ屋上へと向かった

「どういうことが説明してもらおうか和弥！！」

自分とは昔ながらの腐れ縁でもある和弥が内緒にしていたことに腹が立った

「どういうことだと言われても。説明したではないか」

「いつ！？どこで！？」

「夢の中で今までだ」

自分はなにを言ってるのかわからなかった

夢の中で？今まで？もしかして

「まてそれじゃ今までの幻聴とかに出てきた声というのは！？」

「そう俺だ」

「ならなんで！？」

「それは俺の仕事だからだ」

「なぜ言わなかった！！」

「言ったところで変わるものなのか？お前の好きという感情は」

自分は一瞬言葉を失った

確かに和弥の言うとおりで

だが聞きたいことはたくさんあるがなにを聞けばいいのかわからなくなった

「まー順繰りに説明していこうか」

和弥は壁に腰掛けて座ると自分はその隣に座った

「まず俺の一族にはみんなの好きという気持ちがわかる」

「だからいろんな国の人達に好きという言葉伝えてきた」

「そしてここにたどりついたとき夕華がお前のことが好きというのはわかってたんだ。ここまではいいか？」

なにを言ってるのかさっぱりわからないが、たしかに夢や幻聴にも出てこれるぐらいだからできて当たり前ではないかと思ったが、夕華はいつから好きだったんだ？

「夕華は小学校のころからお前のことを思っていたのだよ」

「だがお前は夕華のことが好きではないが高校に上がり付き合っていることがわかり、これはやばいと思った」

「このままでは夕華を傷付けそれに気づかないまますごして行くお前が将来にいるからだ」

「そして俺はお前等のことを思い助言やらなにやらしてやった」

「結果お前は巴と仲良くなり巴のおかげで好きという言葉がわかることができた」

「だから巴のことは大事にしるよ？」

自分の胸を小突く和弥を見て心が荒んだ

だがそれを察したかのように和弥は次々と話してくる

「俺の仕事は終わったから次の人を探すために学校を出るんだ」

「だから俺の仕事のためにと思い見送ってくれないか？」

昔からなにかあれば一緒に馬鹿をして楽しみ。そして笑いあった仲ではないか

「それじゃ、納得できるはずねーだろ！！」

自分は和弥の胸倉をつかみ押し倒した

「なんでお前がいなくならなきゃいけないんだよ！？これからも遊んで笑うんだろ！？」

「お前がいなくなるなんて納得できねーよ！！」

自分は泣いている。かけがえのない友人を失うのが悲しいからだ

「だな、お前自身は納得いかないが俺は納得している」

「お前に好きという言葉が見つかることができてよかった。本当は夢の中でさよならをしたかった」

「だが、お前は俺の大切な友人だ。仲間だ、だから実際に話したかった」

「だったらせめて卒業するまで居てくれよ！？」

自分は久々に泣いている。本当に和弥がいなくなるのは悲しいからだ

「でもそれはできないんだ。俺等の一族の掟なんだよ」

「好きという言葉伝えて終えたら次の場所へと移らなければならない」

「掟なら破ればいいたろうが！！」

声を張り上げて叫んだせいで音が響いた

「それはできないんだ。そうしたら俺は消えてしまうから」

「っ！？」

和弥が消えてしまうとはどういうことだ

自分は和弥の胸倉を離しもう一度聞いた

「消えてしまうってどういうことだよ？」

「そのままの意味だ。記憶から消えて消滅してしまうんだよ」

自分はなにとも言えなかった。いや言葉が見つからなかった

「だがお前の記憶に留めておきたいから俺はここを去る」

最善策を和弥は見つけた

自分にはそう思うしかなかった

「ということだから今まで楽しかったよ。お前の記憶に和弥が残っているならまた会えたら遊ぼうな」

「ああ・・・」

「ま一夢でまた会ってやるよ」

「ああ」

「それじゃ巴を大切にするんだぞ？しなかったら俺のしたことが無になってしまう」

「わかってる・・・巴は俺の大切な人だからな」

「本当にこれでお別れだな・・・楽しかったぞ」

そう和弥は言うのと消えていった

自分は泣き崩れたが和弥と約束したことを思い出し巴の元へと行った

そして日常へと戻った

---

「大切な友のおかげで大切な人を手に入れたんだな」

昔を思い出しながら自分は星空を見つめていた

「？」

隣には巴がいて街の中を一緒に歩いていた

「いや少し昔のことを思い出してただけだよ」

「そういや一昔と言えは海くんと親が会うときは笑ったよー」

自分は少し照れたが実際にあんなことやれば笑うよなと思った

「でもま一俺は巴は大切な人だ。俺が一生かけて大切に続ける」

そう巴にも誓い、両親にも誓い、和弥にも誓った

好きという言葉

それは表面上のことではない

心から想いそして誰かのおかげでわかることではないかと

自分は思う

この言葉はどんどん語り継ぐだろう

「俺は巴が好きだ、一生大切にするよ」

自分は星空を見ながら好きという言葉を誓った

## 好きという言葉

<http://p.booklog.jp/book/26611>

著者：猫乃 春

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/haru6004/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26611>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26611>